

仙台市文化財調査報告書第211集

# 仙台平野の遺跡群 XV

— 平成 7 年度発掘調査報告書 —

燕沢遺跡第 9 次調査など

1996年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第211集

# 仙台平野の遺跡群 XV

— 平成 7 年度発掘調査報告書 —  
燕沢遺跡第 9 次調査など

1996年3月

仙台市教育委員会

## 序文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて15年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、燕沢遺跡の範囲の確認調査ならびに性格究明のための発掘調査、および、郡山遺跡の集合住宅建築に伴う発掘調査を実施しました。本書はそれらの調査成果をまとめたものであります。

当市は平成元年4月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。一方、民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

今後とも広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、精一杯努力してまいる所存でありますので、さらなる御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成8年3月

仙台市教育委員会  
教育長 坪山繁

## 例 言

1. 本書は平成7年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書の土色については「新版標準土色帖」(小山・佐原:1973)を使用した。
3. 実測図中の水糸高は標高である。
4. 実測図、本文中の方位は真北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
5. 本文執筆は、長島榮一 I、II[1]1、2、3、[2]1、2、熊谷裕行 II[2]2、豊村幸宏 II[1]2、3が行い、編集は、長島・豊村がこれにあたった。
6. 遺構略号は次の通りとした。

S A 柱列                  S B 建物跡                  S D 溝跡・溝状遺構  
S I 住居跡・竪穴遺構    S K 土坑                  S X 性格不明遺構

7. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。
8. 今年度事業は平成7年8月に着手し、平成8年3月に終了した。

# 目 次

序文	
例言	
I 調査計画と実績	1
II 発掘調査報告	
[ 1 ] 燕沢遺跡－第9次調査－	
1. 調査経過	2
2. 発見遺構と出土遺物	
a区・d区	3
b区	18
c区	20
3.まとめ	20
写真図版	25
[ 2 ] 郡山遺跡	
1. 位置と環境	33
2. 調査概要	
第108次調査	33
第109次調査	33

## I 調査計画と実績

仙台市は昭和62年に宮城町、昭和63年に泉市、秋保町と合併し、明治22年の市制施行以来100周年にあたる平成元年に、全国11番目の政令指定都市に移行した。さらに市営地下鉄の開業や延長、仙台空港の国際化、高速道路網の充実によって著しい都市化が進む状況になってきている。旧仙台市域では辛うじて残っていた農地も急速に宅地になり、緑ゆたかであった郊外の丘陵地も開発の予定が表明される時世となっている。

仙台市内の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－は700箇所に達するが、日々変化する社会の中で現状のまま将来に残し、伝えていくのはきわめて困難である。このような中で開発に対応した発掘調査だけではなく、事前に遺跡の範囲と性格究明を目的とした発掘調査を実施して行くことが、今後の遺跡保護に重要と考えられる。また遺跡内での個人住宅や木造の共同住宅建築のような小規模開発に伴う発掘調査も必要に応じ実施し継続していくことが、遺跡の範囲確認や構造の在り方を検討するうえでも有用と考えられる。それらを目的として当市教育委員会では昭和56年度より国の補助を受け、「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。これまで郡山遺跡をはじめ、陸奥國分寺跡、陸奥國分尼寺跡、仙台城跡門跡、大年寺跡門、長町駅東遺跡（長町貨物ヤード跡地）で発掘調査を実施し、大きな成果をあげている。

今年度は燕沢遺跡と郡山遺跡で発掘調査を実施した。燕沢遺跡は平成5年度から継続的に調査し、今年度で3年次目になる。昨年の第8次調査では平安時代の建物跡を発見し、寺院の僧房であると考えられた。今回の第9次調査では、その南方で寺院の中心的な建物を発見する目的で実施した。また郡山遺跡では共同住宅建設に伴っての小規模な発掘調査を2地点（第108次、第109次）で実施した。なお郡山遺跡での発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第210集「郡山遺跡XVI－平成7年度発掘調査概報－」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめる。

### 1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲、性格究明のための発掘調査

#### 2. 調査面積 522m<sup>2</sup>

#### 3. 調査期間 平成7年8月～3月

#### 4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

課長 小井川和夫

調査第一係 係長 田中 則和 主査 木村 浩二 主事 長島 栄一

教諭 熊谷 裕行

調査第二係 係長 結城 慎一 主査 徳原 信彦 文化財教諭 戸村 実宏

管理係 係長 千葉 晴洋 主査 村上 道子 主事 福井 健司

主事 斎藤 英治

調査実績表

調査地	所在地	申 済 者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
燕沢遺跡	宮城野区燕沢東二丁目526他	仙台市教育委員会 教育長 坂山 繁	範囲確認	513m <sup>2</sup>	450m <sup>2</sup>	平成7年10月23日～12月15日
郡山遺跡	太白区郡山二丁目68-2	仙台市青葉区上杉二丁目1-14 セルコホーム株式会社 代表取締役 新本恵弘	共同住宅建築	40m <sup>2</sup>	40m <sup>2</sup>	平成7年8月1日～8月4日
郡山遺跡	太白区郡山五丁目50-16	宮城県柴田郡村山町大字荒生字守前22-6 局場 繁	共同住宅建築	32m <sup>2</sup>	32m <sup>2</sup>	平成7年11月27日～12月4日

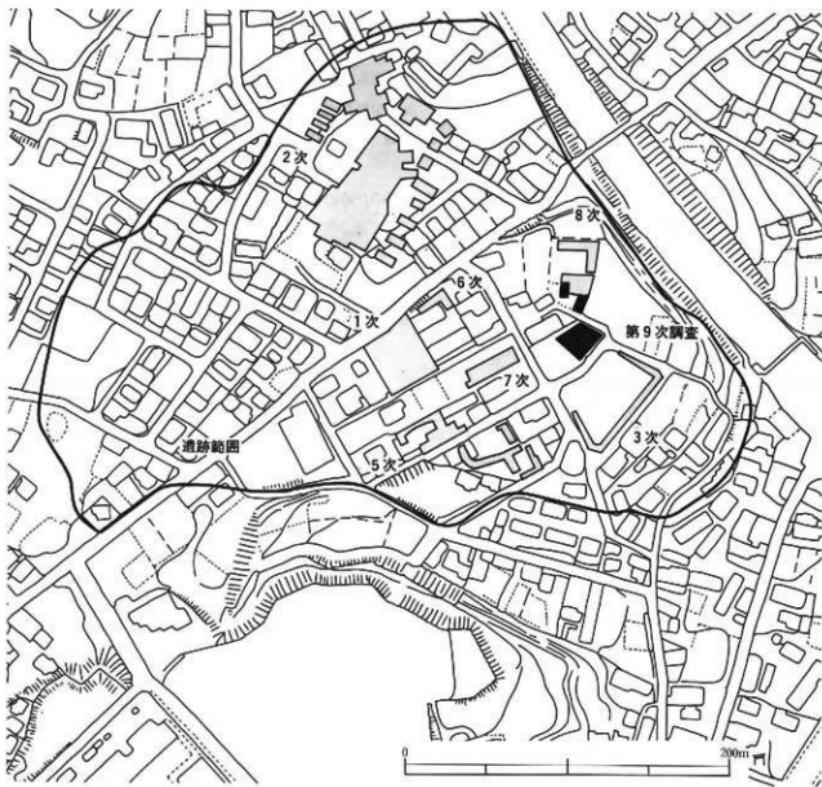
## II 発掘調査計画と実績

### [ 1 ] 燕沢遺跡－第9次調査－

#### 1. 調査経過

平成5年度の第7次調査より、遺跡内の最も標高の高い平坦地で発掘調査を実施している。今年度は第8次調査の南側に調査区を4箇所設定し実施した。a区は第8次調査で「僧房」と考えられたS B 2掘立柱建物跡の南側に講堂のような寺院の中心的な建物跡が存在するかどうかを明らかにするために設定した。b区はS B 2掘立柱建物跡に接続するような廊下などの施設の有無、c区は昨年の調査区の制約から検出されなかったS B 2掘立柱建物跡の南西隅の調査を目的としている。また今年度発見したS B 3掘立柱建物跡の規模を明らかにするため、d区を設定した。

発掘調査は10月23日から実施し、遺跡の概要が明らかとなった11月20日に報道発表、11月23日に現地説明会を実施した。野外における発掘調査が終了したのは12月15日であった。



第1図 調査区位置図

## 2. 発見遺構と出土遺物

第9次調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡4棟、柱列3列、溝跡9条、竪穴遺構2基、土坑14基、小柱穴、ピットなどである。これらの遺構は畑の耕作土（基本層位第I b層）の直下の第II層で検出されている。a区についてのみ、畑の耕作土の上に盛土（基本層位第I a層）がされていた。

遺構番号、遺物番号については第7次調査からの継続番号であり、第1次調査から第6次調査までとは区別している。また遺構の中には検出したにとどめ掘込まなかったものもあり、詳細の明らかでない遺構は記載を略している。

### ○ a 区

**S B 3 掘立柱建物跡** 枠行4間ないし5間、総長4.5m以上（柱間寸法220~240cm）、梁行3間、総長6.5m（柱間寸法185~210cm）の東西棟の建物跡で、方向は梁行でN-E~Eで、ほぼ真北方向である。柱穴の掘り方は一辺98~118cmの刷毛方形で、柱痕跡は直径27~37cmの円形である。柱穴の深さは遺構を検出した上面より50~55cmで、柱痕跡の箇所が掘り方底面より1段低くなっている。柱穴に抜き取り穴がみられるものがあり、抜き取り穴の底面で柱痕跡が観察されるため柱材を上部で切り取ったものと考えられる。

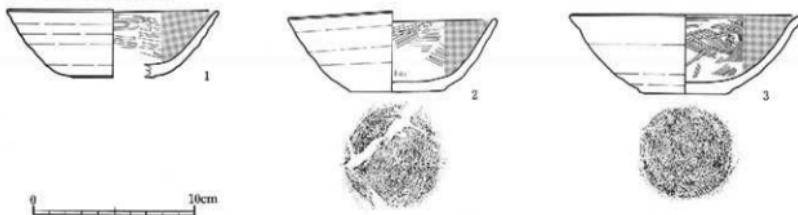
S K16土坑、SD13溝跡を切っている。



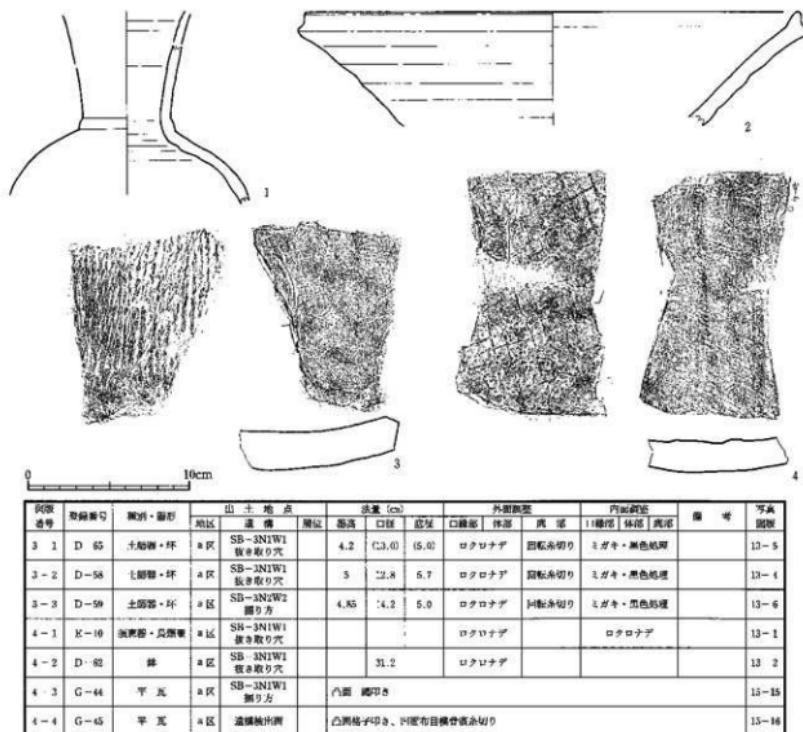
第2図 SB 3 掘立柱建物跡断面図

### [出土遺物]

柱穴の掘り方埋め土中よりロクロ調整で内面黒色処理された土師器D-59杯（第3図3）、格子叩きが凸面に施されたG-44平瓦（第4図3）、網叩きが凸面に、ナデが凹面に施されたG-45平瓦（第4図4）が出土している。この他に掘り方埋め土中からロクロ調整の土師器坏、壺、須恵器坏、壺片が出土している。抜き取り穴からは、ロクロ調整で内面黒色処理された土師器D-58、65（第3図1）、66杯、頭部にリング状の突帯を有する須恵器E-10長颈壺（第4図1）、須恵器E-11、12、13壺体部が直線的に外傾する大型の赤焼き土器D-62鉢（第4図2）、赤焼き土器坏底部と平瓦の小片が出土している。これらのうち土師器D-58、66杯は内面に黒色ないし褐色の付着物が観察される。



第3図 SB 3 掘立柱建物跡出土遺物（1）



第4図 SB 3 堀立柱建物跡出土遺物（2）

S B 4 堀立柱建物跡 柱穴の掘り方は一辺95×85cmの方形で、柱痕跡は30cmである。堀立柱建物跡の北東隅の柱穴と推定される。柱穴には上部より抜き取り穴があり、抜き取り穴の底面で柱痕跡が観察されるため、柱材を上部で切り取ったものと考えられる。

S I 5 穴空造構を切っている。

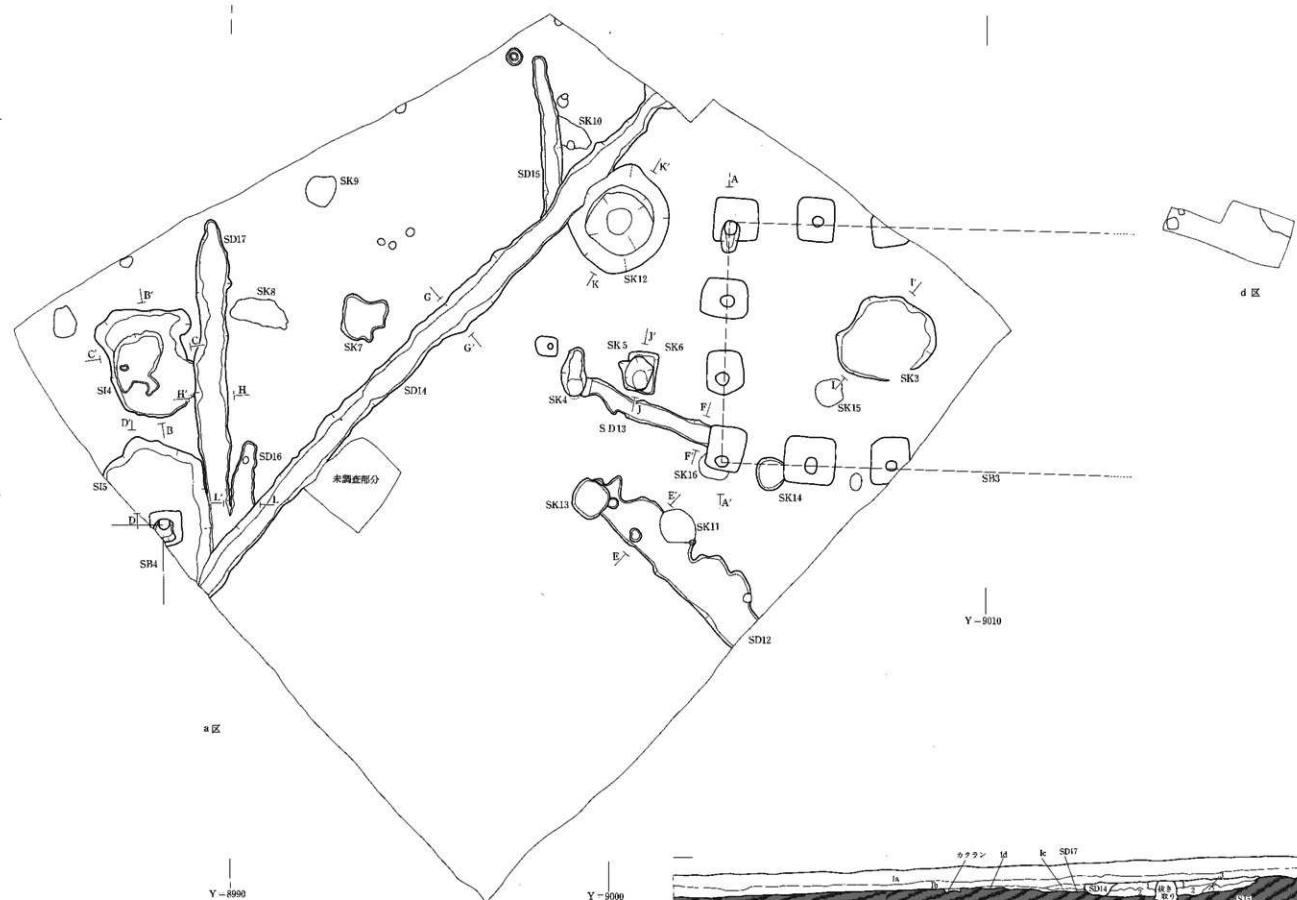
【出土遺物】 遺物は出土していない。

S I 4 穴空造構 東西2.5m、南北2.9mで、不整形である。残存する深さは6~23cmで、壁は緩やかに立ち上がる。底面で14×22cmの小規模なビットを検出した。堆積土は黒褐色・ぶい黄褐色シルトで、炭化物や焼土が少量含まれている。堆積土中からはロクロ調整で内面黒色処理された土師器の环が50個ほど出土し、重なりあって出土したものが多い。

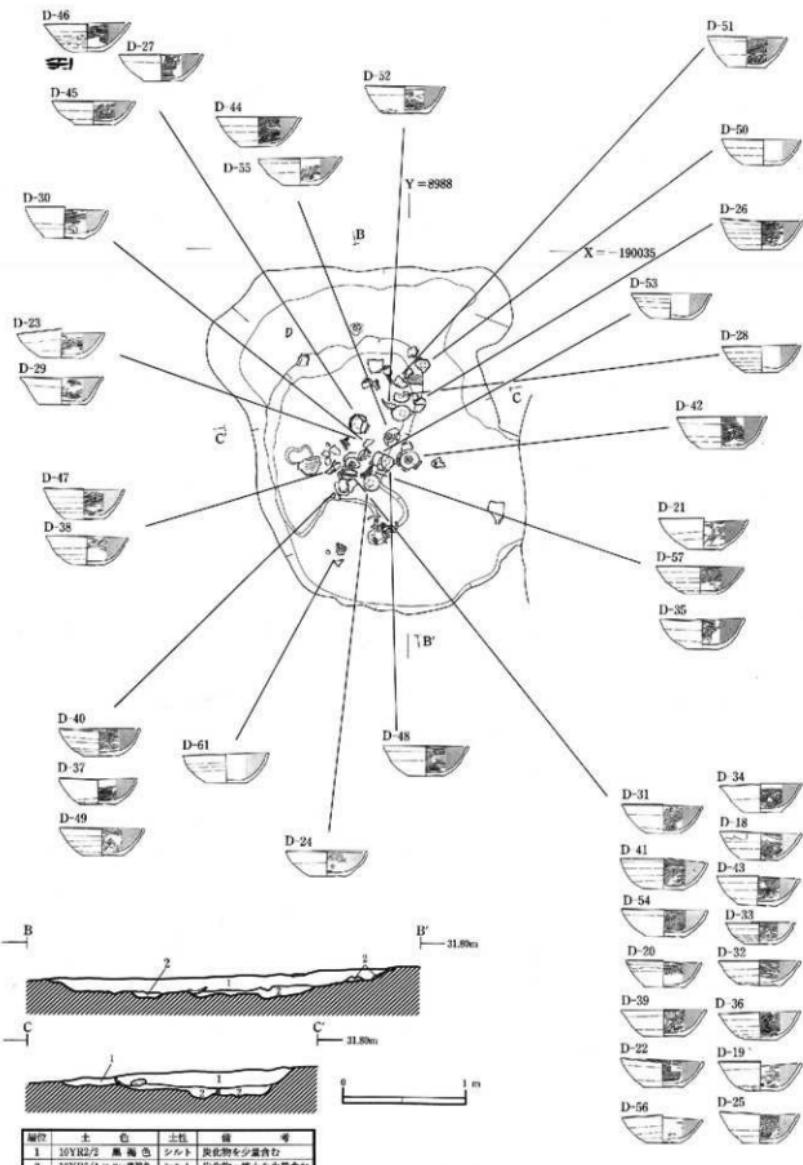
S D17溝跡に切られている。

【出土遺物】 堆積土中より土師器環(D-18~57、61など)、丸瓦2点、平瓦1点が出土している。土師器環はロクロ調整され、内面へラミガキ・黒色処理されている。ラミガキは体部が横方向、底部が横方向か放射状である。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。体部下端に手持ちヘラケグリが施されたものが少量(D-19、37、52)ある。器面はきわめてもらろい。ほぼすべての土器に油煙が観察され(註1)、火芯の痕跡を残すものもある。

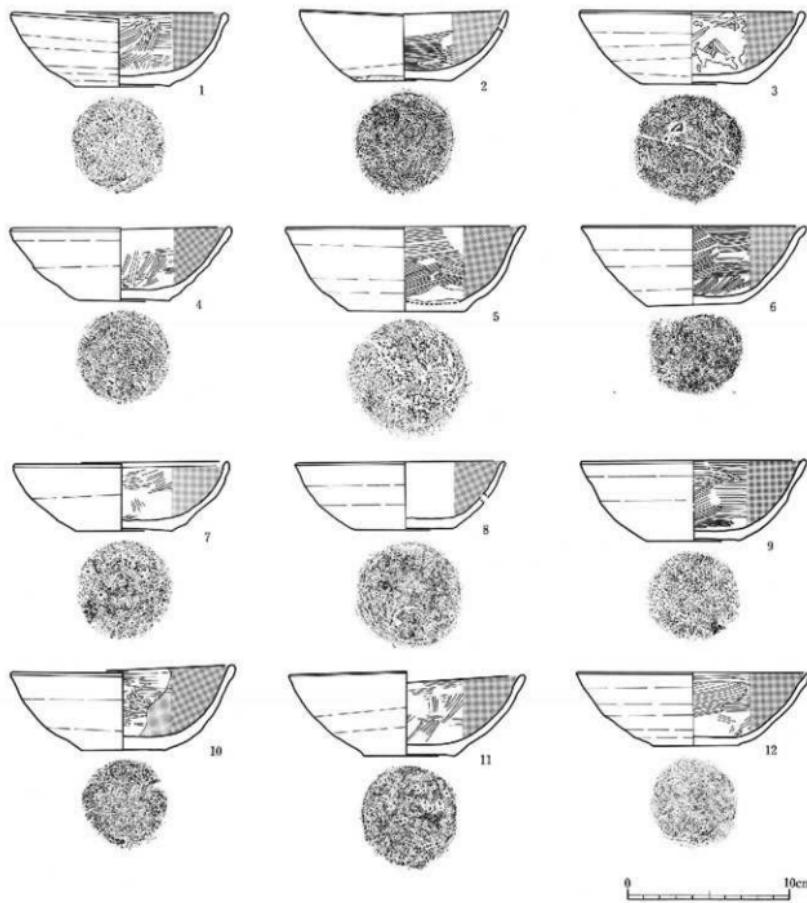
F-18、22丸瓦のうちF-18丸瓦は粘土紺巻き作りである。G-34平瓦は凸面縄引き、凹面粗い布目が観察される。出土した遺物については 3.まとめ の項で検討を加える。



第5図 a・d区平・断面図

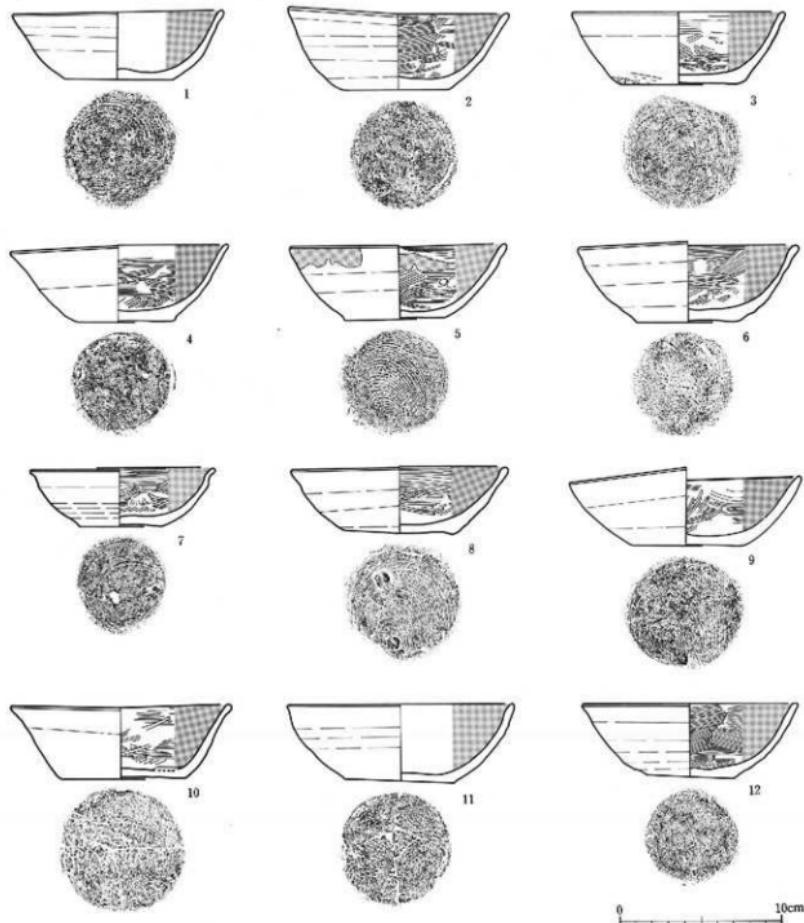


第6図 S14 穴造構遺物出土状況・断面図



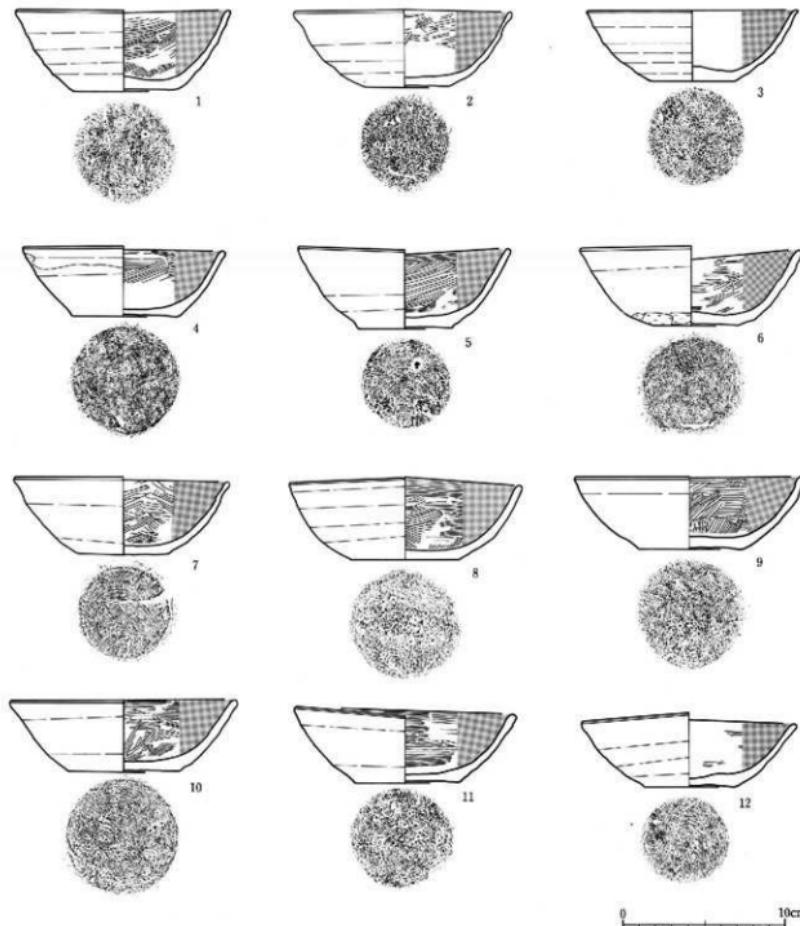
品番 番号	発 見 場 所	施 設 ・ 形 式	出土状況	径 直 (cm)			外周窓			内周窓			備 考	参考 図版
				地 方	造 型	縁 幅	口 径	厚 さ	口縁部	体 部	底 部	底 部	内縁部	外縁部
1	D-49	土器窯・井	a区	SI-4	4.6	12.4	5.6	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-5		
2	D-37	土器窯・井	a区	SI-4	4.1	12.8	5.7	ロクロナゲ・カツラギ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-2		
3	D-49	土器窯・井	a区	SI-4	4.5	13.8	6.5	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-12		
4	D-55	土器窯・井	a区	SI-4	4.6	13.6	5.7	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-18		
5	D-42	土器窯・井	a区	SI-4	5.3	14.8	7.1	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-19		
6	D-44	土器窯・井	a区	SI-4	5.0	12.6	5.6	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-8		
7	D-24	土器窯・井	a区	SI-4	4.3	13.2	5.8	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	13-15		
8	D-50	土器窯・井	a区	SI-4	4.7	13.0	6.2	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-15		
9	D-48	土器窯・井	a区	SI-4	4.95	14.0	5.8	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・凹面处理		14-11		
10	D-35	土器窯・井	a区	SI-4	4.2	13.8	5.3	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	13-24		
11	D-21	土器窯・井	a区	SI-4	5.2	14.5	5.7	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	13-10		
12	D-57	土器窯・井	a区	SI-4	4.6	14.4	5.2	ロクロナゲ	回転丸切り	ミガキ・黑色丸縁	付着物あり	14-20		

第7図 S14 穴竪遺構出土遺物(1)



回数 番号	種類・器形	出土地点		汎用 (cm)		外寸測定		内部調査		備考	写真 図版
		地区	遺構	深さ	口 径	底径	口側部	体 部	底 部		
1	D-53 土師胎・环 a 区	SI-4		4.3	13.0	5.6	ロクロナズ	四輪赤切り	黒色地帯	付着物あり	14-16
2	D-26 土師胎・环 a 区	SI-4		4.7	13.6	5.4	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	13-15
3	D-82 土師胎・环 a 区	SI-4		4.45	(13.2)	7.2	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯		14-15
4	D-34 土師胎・环 a 区	SI-4		4.75	13.5	6.0	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	13-23
5	D-18 土師胎・环 a 区	SI-4		4.6	13.4	6.3	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	13-7
6	D-45 土師胎・环 a 区	SI-4		4.9	13.6	6.6	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	14-7
7	D-33 土師胎・环 a 区	SI-4		3.6	(11.3)	5.9	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯		13-22
8	D-32 土師胎・环 a 区	SI-4		4.90	13.4	6.9	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	13-21
9	D-33 土師胎・环 a 区	SI-4		4.8	14.3	6.8	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	13-12
10	D-29 土師胎・环 a 区	SI-4		4.5	13.6	7.7	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	13-18
11	D-61 土師胎・环 a 区	SI-4		4.9	14.3	6.8	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯		15-2
12	D-36 土師胎・环 a 区	SI-4		4.6	13.2	9.3	ロクロナズ	四輪赤切り	ミガキ・黑色地帯	付着物あり	14-1

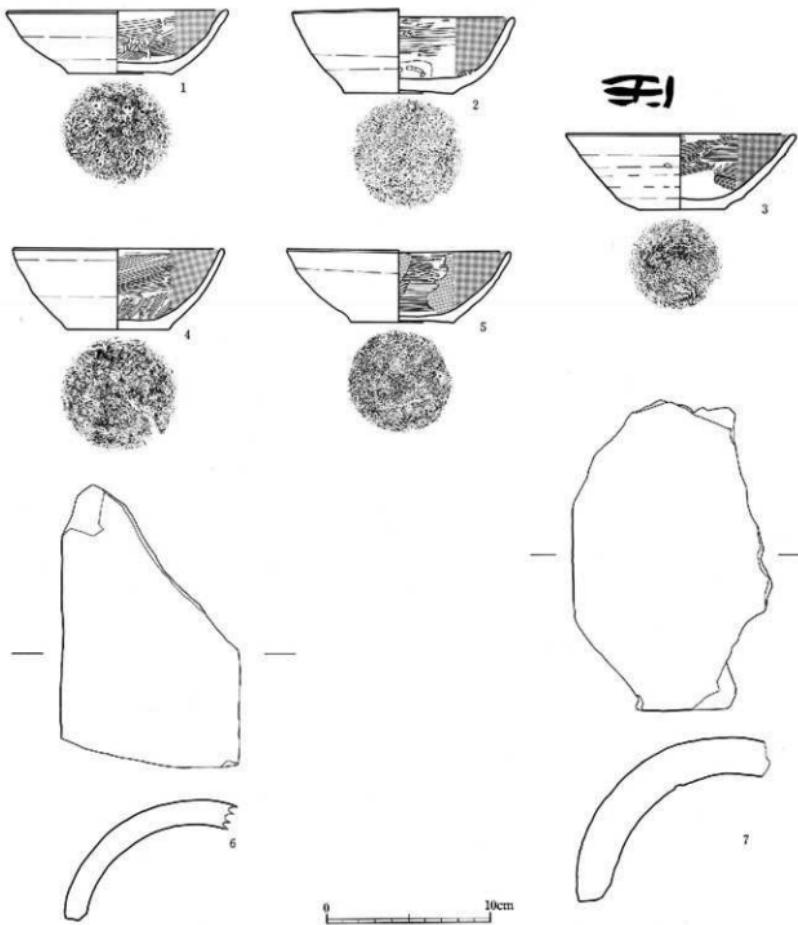
第8図 S1 4号竪穴遺構出土遺物 (2)



0 10cm

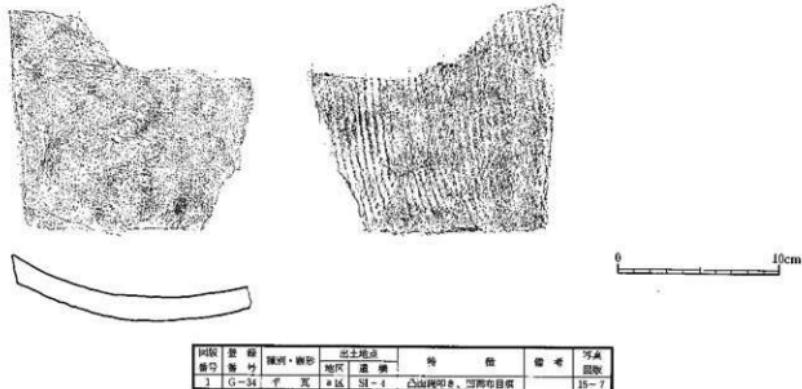
回数 番号	登録番号	説明・形態	判地底灰			外縁剥離			内縁剥離			備考	等真 回数
			地区	透 標	層位	高さ	口 径	底深	口縁部	体部	底 部	口縁部	体部
1	D-47	土師器・坪 a区 SI-4				5.1	13.3	6.1	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・無色透明	行管物あり	14-19
2	D-38	土師器・坪 a区 SI-4				4.8	13.4	5.2	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・無色透明	行管物あり	14-3
3	D-28	土師器・坪 a区 SI-4				4.4	13.1	5.2	ロクロナデ	黒色化粧	行管物あり	13-17	
4	D-29	土師器・坪 a区 SI-4				4.35	12.4	6.6	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・無色透明	行管物あり	13-9
5	D-25	土師器・坪 a区 SI-4				4.8	13.05	5.8	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・無色透明	行管物あり	13-14
6	D-19	土師器・坪 a区 SI-4				4.9	13.8	5.2	ロクロナデ・ケズリ	ミガキ・無色透明	行管物あり	13-8	
7	D-31	土師器・坪 a区 SI-4				4.9	13.4	5.6	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・無色透明	行管物あり	13-20
8	D-41	土師器・坪 a区 SI-4				5.4	14.3	6.9	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・黑色透明	行管物あり	14-6
9	D-54	土師器・坪 a区 SI-4				4.45	14.1	6.4	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・黑色透明	行管物あり	14-17
10	D-39	土師器・坪 a区 SI-4				4.4	14.6	6.9	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・黑色透明	行管物あり	14-4
11	D-22	土師器・坪 a区 SI-4				4.7	13.7	6.5	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・無色透明	行管物あり	13-11
12	D-56	土師器・坪 a区 SI-4				4.5	12.3	5.5	ロクロナデ	剥離角切り	ミガキ・黑色透明	行管物あり	15-1

第9図 S1-4豎穴遺構出土遺物（3）



回数 番号	登録番号	種別・器形	出土地点		法 規 寸 法 寸 度 (cm)	外 面 特 徴		内 面 特 徴	備 考	写真 図版	
			地 区	遺 構	層 位	深 度	口 底 底 部	口 縁 縁 部	外 縁 縁 部		
1	D-45	土器盤・杯	a区	SI-4	4	13.6	6.5	□ プロテダ	斜板あり	ミガキ・黒色處理 付着物あり	14-9
2	D-26	土器盤・杯	a区	SI-4	5.2	(13.6)	6.8	□ プロテダ	斜板あり	ミガキ・黒色處理 付着物あり	13-19
3	D-46	土器盤・杯	a区	SI-4	4.7	14.2	5.3	□ プロテダ	斜板あり	ミガキ・黒色處理 付着物・墨跡	14-21
4	D-51	土器盤・杯	a区	SI-4	5.0	13.9	6.2	□ プロテダ	斜板あり	ミガキ・黒色處理 付着物あり	14-16
5	D-27	土器盤・杯	a区	SI-4	4.5	13.8	6.4	□ プロテダ	斜板あり	ミガキ・黒色處理 付着物あり	13-16
6	F-22	丸瓦	a区	SI-4	門限	布丁瓦					15-5
7	F-18	丸瓦	a区	SI-4	△	西鉢形十脚金を作り。三面有目窓					15-4

第10図 S14 竪穴遺構出土遺物 (4)



第11図 SI 4 穫穴遺構出土遺物（5）

**S I 5 穫穴遺構** 東西2.7m以上、南北3.5m以上で、不整形と推定される。残存する深さは20~40cmで、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中心部分に向かってきわめて緩やかに傾斜している。堆積土は暗褐色シルトである。

**S B 4 挖立柱建物跡の柱穴に切られている。**

【出土遺物】 堆積土中より土師器壺、甕片、須恵器壺、甕、瓦、繩文土器片が出土している。

**S D 12溝跡** 総長5.7m以上で斜面下方に延びる溝跡である。上幅86~154cm、下幅60~123cm、深さ4~10cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面には凹凸がある。方向はN-45°-Wで、堆積土はにぶい黄褐色シルトである。

**S K 11土坑を切り、S K 13土坑に切られている。**

【出土遺物】 堆積土中より土師器の甕片が6点出土している。

**S D 13溝跡** 総長3.6mほどの東西に延びる溝跡である。上幅42~60cm、下幅28~50cm、深さ4~6cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面はほぼ平坦である。方向はE-22°-Sで、堆積土は明黄褐色シルトである。

**S B 3 挖立柱建物跡、S K 4 土坑に切られている。**

【出土遺物】 堆積土中より土師器の小片が少量出土している。

**S D 14溝跡** 総長17.8m以上で丘陵の尾根の方向に延びる溝跡である。上幅42~102cm、下幅20~52cm、深さ6~23cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形あるいは逆台形である。上部が削平され、底面には凹凸がある。方向はN-44°-Eで、現在の土地境界と重複している箇所がある。堆積土は暗褐色、褐色粘土質シルトである。

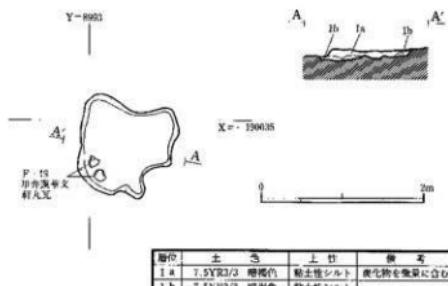
**S D 15、16、17溝跡、S I 5 穫穴遺構、S K 12土坑を切っている。**

【出土遺物】 堆積土中より土師器、赤焼き土器、須恵器、瓦、鉄製品が少量出土している。

**S D 15溝跡** 総長4mほどの南北方向に延びる溝跡である。上幅30~52cm、下幅22~36cm、深さ3~7cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面には凹凸がある。方向はN-6°-Wである。

**S K 10土坑を切っている。**

- 【出土遺物】 堆積土中より土師器の坏片が1点出土している。
- S D16溝跡 総長2.5mほどの南北方向に延びる溝跡である。上幅34~60cm、下幅26~45cm、深さ5~7cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-8°-Eで、堆積土は黒褐色シルトである。
- S D17溝跡を切り、S D14溝跡に切られている。
- 【出土遺物】 堆積土中より土師器、須恵器、瓦片が少量化出土している。
- S D17溝跡 総長9m以上で南北方向に延びる溝跡である。上幅50~90cm、下幅22~70cm、深さ4~10cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-2°-Wで、堆積土は黒褐色シルトである。
- S I 4、5竪穴遺構を切り、S D16溝跡に切られている。
- 【出土遺物】 堆積土中よりG-39、40平瓦(第14図6、第15図3)、土師器坏、甕、赤焼き土器坏、須恵器坏、瓦片が少量化出土している。
- S K 3 土坑 南北220cm、東西260cmの隅丸方形の土坑で、深さは5~13cmである。底面はやや凹凸がある。土坑の南端が削平されている。堆積土は暗褐色、明黄褐色シルトなどである。
- 【出土遺物】 堆積土中より土師器、須恵器、瓦片が出土している。
- S K 4 土坑 南北127cm、東西62cmの楕円形の土坑で、深さは6~34cmである。底面は北から南に傾斜し、南端で検出した上端より内側に入り込んでいる。堆積土は暗褐色、黒褐色シルトである。
- S D13溝跡を切っている。
- 【出土遺物】 堆積土中より土師器、須恵器、瓦の小片が出土している。
- S K 5 土坑 南北90cm、東西95cmの不整形の土坑で、深さは37~41cmである。底面はやや凹凸がある。堆積土は黒褐色、褐色シルトなどである。
- SK 6 土坑を切っている。
- 【出土遺物】 堆積土中より平瓦片が1点、丸瓦片が3点出土している。
- S K 6 土坑 南北110cm、東西78cmの長方形の土坑で、深さは10~12cmである。底面はほぼ平坦である。堆積土は褐色シルトである。
- S K 5 土坑に切られている。
- 【出土遺物】 遺物は出土しなかった。
- S K 7 土坑 南北110cm、東西115cmの不整形の土坑で、深さは7~14cmである。底面はやや凹凸がある。土坑の東端が擾乱により削平されている。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。
- 【出土遺物】 堆積土中よりF-19單弁蓮華文軒丸瓦(第14図1)、土師器壺片が1点出土している。
- S K 12 土坑 南北280cm、東西270cmの円形の土坑で、深さは130cmである。底面は丸みがあり鍋底状を呈している。土坑の底面には桶が設置され、崩れた部材が底に堆積していた。堆積土は上層が暗褐色シルト、灰褐色粘土質シルトなどであるが、下層になるにしたがってグライ化が進み、最下層は青灰色粘土となる。



第12図 SK 7 土坑平・断面図

S D14溝跡に切られている。

[出土遺物] 堆積土中より土師器、赤焼き土器、須恵器、瓦片、金具が出土し、底面からはF-20軒丸瓦、焼瓦片が出土している。

S K13土坑 南北180cm、東西100cmのほぼ円形の土坑で、深さは12cmほどである。底面は平坦である。

S D12溝跡を切っている。

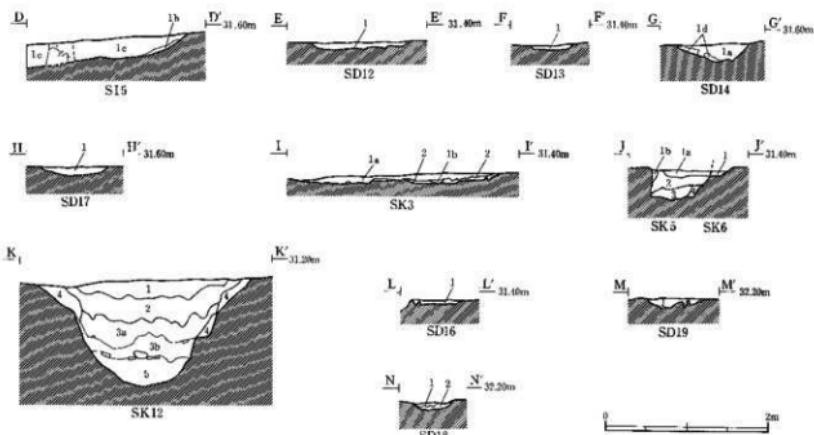
[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

S K14土坑 南北86cm、東西70cm以上のほぼ円形の土坑で、深さは4~8cmほどである。底面はやや凹凸がある。

S B3掘立柱建物跡に切られている。

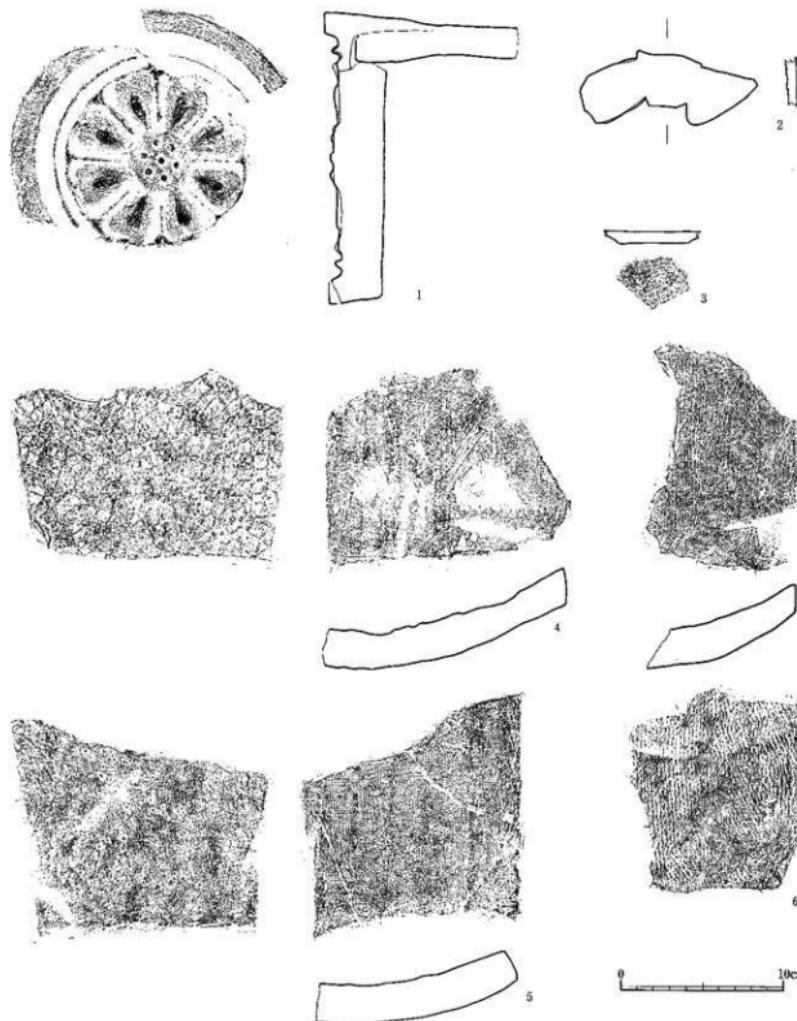
[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

S K8、9、10、11、15、16土坑は検出したにとどめている。



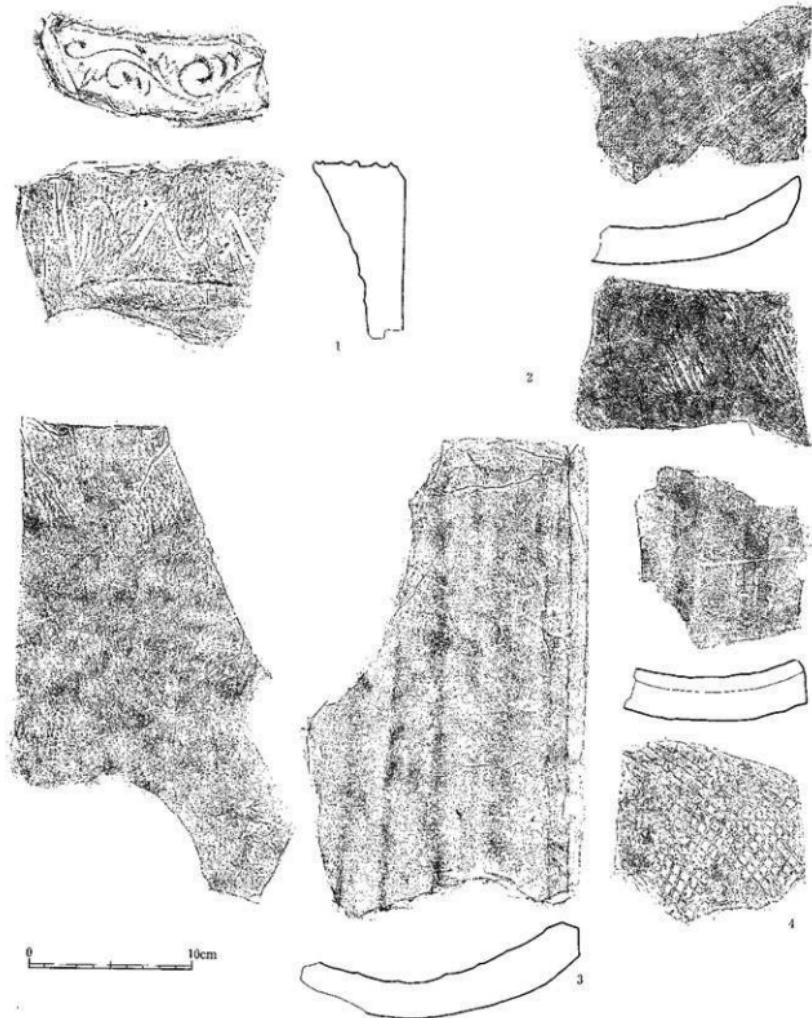
遺構名	層次	土 色	土 壤	層	号
SI 5	1	10YR4/3 暗褐色	シルト	羽黄褐色土をブロック状に含む、木炭粒を微量に含む	D-D'
SD02	1	10YR4/3 暗褐色	シルト	しまりがある	E-E'
SD03	1	7.5YR5/3 明褐色	シルト		F-F'
SD14	1 a	7.5YR3/3 暗褐色	粘土シルト		G-G'
	1 b	7.5YR4/6 暗褐色	粘土シルト		
SD07	1	10YR4/3 暗褐色	シルト	米褐色粘土粒を微量に含む	H-H'
SK 3	1 a	10YR3/3 暗褐色	シルト		I-I'
	1 b	10YR3/5 黄褐色	シルト		
	2	10YR5/6 明褐色	シルト		
SK 5	1 a	10YR3/2 暗褐色	シルト		J-J'
	1 b	7.5YR4/3 暗褐色	シルト		
	2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	灰化物、飛土を多量に含む	K-K'
	3	7.5YR4/2 暗褐色	シルト	灰化物、飛土を含む	
	4	5 YR4/4 にかいろ褐色	シルト		
SK 6	1	10YR4/4 暗褐色	シルト		J-J'
SK12	1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト		K-K'
	2	10YR4/2 暗褐色	粘土シルト		
	3 a	10YR4/1 暗褐色	粘土シルト	鈍化鉄を微量に含む	
	3 b	5 YR3/1 オーバーブラウン	粘土シルト		
	4	10YR5/9 明褐色	シルト		
	5	5 Bi/1 青灰色	粘土	植の吸材を多量に含む	
SD16	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	米褐色粘土粒を微量に含む	L-L'
SD08	1	10YR3/2 暗褐色	シルト		N-N'
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト		
SD19	1	7.5YR4/2 暗褐色	シルト		M-M'

第13図 第9次調査断面図(溝跡・土坑)



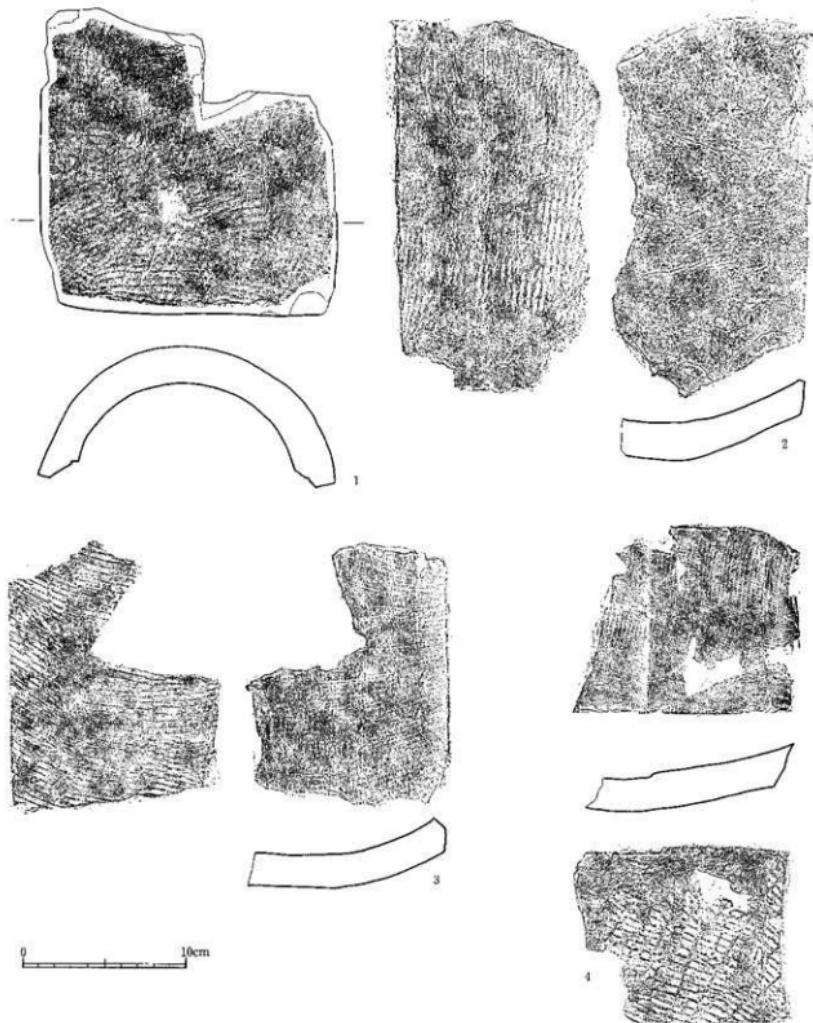
回収 番号	基 盤	様 式	出 土 地 点	特 徴		保 証 番 号	写 真 回 数
				遺 跡	層 位		
1	F-19	軽丸瓦	a区	SK-7	幕井遺跡文前丸瓦、布目瓦	15-9	
2	I-3	深輪陶器	b区	SB-3 SW1	縫り瓦	15-3	
3	D-60	三輪・片	a区	SI-5	片輪・浅輪・縫合瓦、Xの跡付	15-8	
4	G-43	平 瓦	a区	SB-3 NW1	縫り瓦	15-14	
5	G-33	平 瓦	b区	SA-2 K1	縫り瓦	15-25	
6	G-39	平 瓦	b区	SD-17	凸面輪目印き、凹面帶目印	15-12	

第14図 第9次調査出土遺物（1）



件番 番号	文様 模様	地質 岩相	出土地点 地区	遺構 構種	特徴		参考 文献
					層位	層位	
1 G-41	斜方格子	C区	SD-15	古墳時代中期後葉・奈良時代初期	...	...	15-11
2 G-42	平行	b区	SD-19	△山側門司城跡→ナデ、田原町門司→赤切り	...	...	15-17
3 G-46	平行	a区	SD-17	△西田町寺跡→ナデ、西田町寺跡→ヘリナズ	...	...	25-10
4 G-36	平行	a区	遺構未発見	△山側門司城跡→ナデ、田原町門司→ナデ	...	...	15-20

第15図 第9次調査出土遺物（2）



品番	名 号	縁形	出土地点	特 徴	備 考	図版
1	F-21	丸A	△区 連続横山周	内底平行凹S、刃面布目模		1a-1b
2	G-37	平A	△区 連続横山周	凸刃平行凹S、刃面布目模+チダ		1c-1d
3	G-38	平A	△区 連続横山周	凸刃平行凹S、刃面布目模、素切引抜		1e-1f
4	G-39	平A	△区 連続横山周	凸刃格子凹S、刃面布目模		1g-1h

第16図 第9次調査出土遺物(3)

## ○ b 区

**S B 5 挖立柱建物跡** 枝行2間以上、総長4.3m以上（柱間寸法200～230cm）、梁行2間、総長3.8m（柱間寸法180～200cm）の東西棟の建物跡と推定され、方向は梁行でN-5°-Wである。柱穴の掘り方は一辺35～60cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径15～20cmの円形である。柱穴の深さは遺構を検出した上面より35cmほどである。

**S D 19溝跡**に切られ、S A 2、3、4柱列に切られている。

〔出土遺物〕 柱穴の掘り方埋め土よりI-3綠釉陶器（第14図2）、土師器、赤焼き土器、須恵器、平瓦片が出土している。

**S A 2 柱列** 東西方向に延びる柱列（柱間寸法200cm）で、方向はE-1°-Nのほぼ真東西南方向である。調査区を横断していると推定される。柱穴の掘り方は一辺60～90cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径20cm程の円形である。柱穴の深さは遺構を検出した上面より20～30cmほどである。

**S B 5 挖立柱建物跡**に切られている。

〔出土遺物〕 柱穴の掘り方埋め土よりG-33平瓦（第14図5）、土師器と瓦の小片が少量出土している。

**S A 3 柱列** L字型あるいはT字型に延びると推定される柱列（柱間寸法140cm-南北方向、150cm-東西方向）で、方向は真北方向、真東西方向である。東西方向の柱列の両端は、掘り方が検出されず浅いピットが検出されたにすぎないが、柱穴の推定位置で検出されていることからT字型に延びる可能性も考えたい。柱穴の掘り方は一辺30～50cmの隅丸方形あるいは不整形で、柱痕跡は直径20～26cm程の円形である。

**S B 5 挖立柱建物跡**に切られている。

〔出土遺物〕 柱穴の掘り方埋め土より土師器壺片3点、赤焼き土器环片1点、瓦片3点が出土している。

**S A 4 柱列** 東西方向に延びる柱列（柱間寸法230cm）で、方向はE-9°-Nの方向である。建物跡の北東隅になる可能性もある。柱穴の掘り方は一辺35～45cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径10～15cm程の円形である。

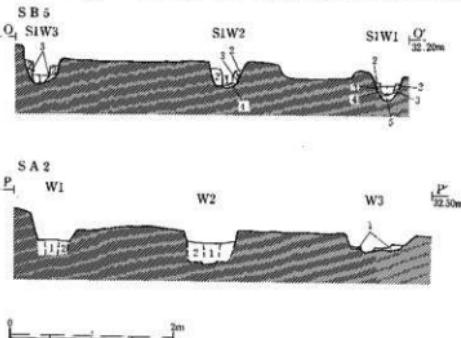
**S B 5 挖立柱建物跡、S D 19、S D 20溝跡**に切られている。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

**S D 19溝跡** c区まで延びており、総長16.7m以上で丘陵の尾根を横断するように延びる溝跡である。上幅56～82cm、下幅20～42cm、深さ9～24cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面は扁平なU字形である。底面には凹凸がある。方向はN-45°-Wで、堆積土は黒褐色シルト、黄褐色粘土質シルトである。

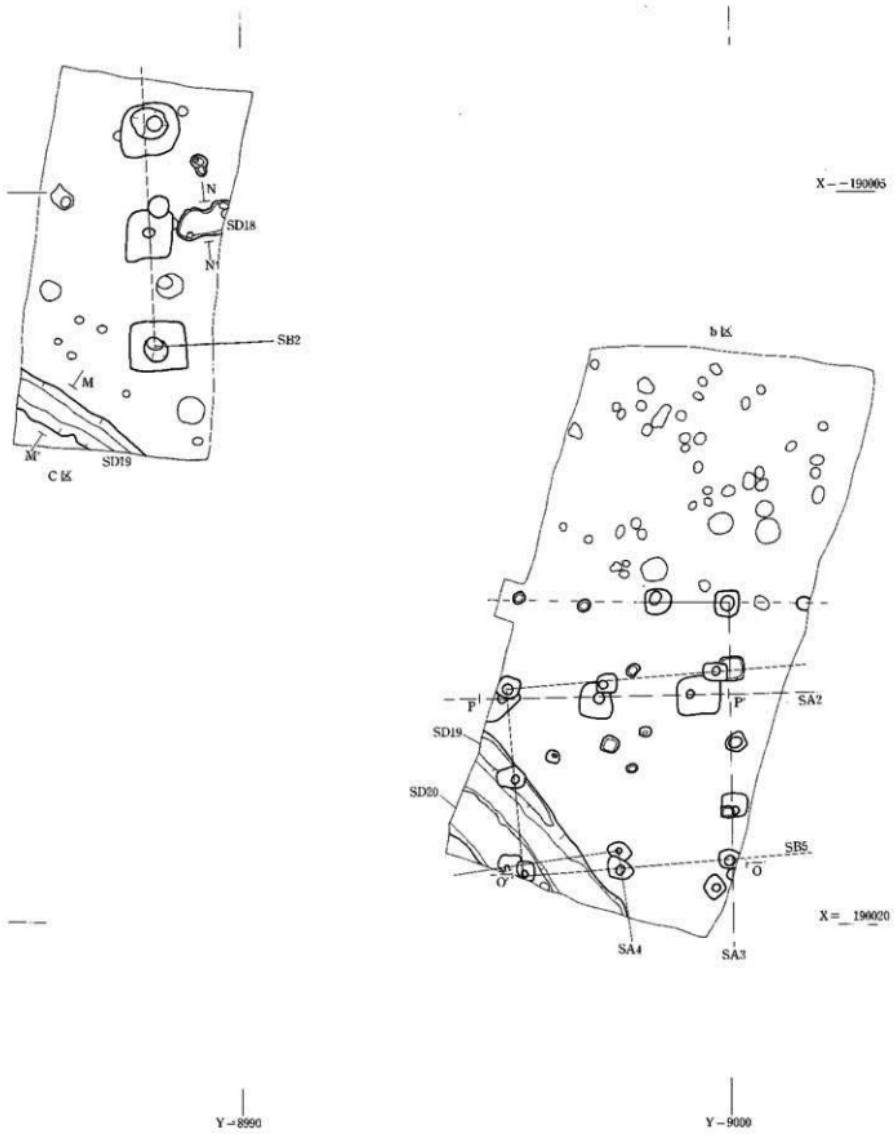
**S B 5 挖立柱建物跡、S D 20溝跡**を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中よりG-42平瓦（第15図2）、土師器、赤焼き土器、須恵器、瓦片が少量出土している。



SB 5			
層位	土色	土性	備考
SIW3	1 10YR2/3 黄褐色	粘土	柱底跡
	2 10YR4/4 黄	粘土	
	3 10YR6/5 明黃褐色	粘土	小礫を少量含む
SIW2	1 10YR2/3 黄褐色	粘土	
	2 10YR4/4 黄	粘土	
	3 10YR4/3 C.E. 黄褐色	粘土	
	4 10YR6/6 切黄褐色	粘土	
	5 10YR6/2 淡黄褐色	粘土	小礫を少量含む
SIW1	1 10YR2/3 黄褐色	粘土	
	2 10YR4/4 黄	粘土	
	3 10YR2/2 に赤色斑作	粘土	
	4 10YR6/6 切黄褐色	粘土	
	5 10YR6/2 淡黄褐色	粘土	小礫を少量含む
SA 2			
層位	土色	土性	備考
W1	1 10YR2/3 黄褐色	粘土	柱底跡
	2 10YR4/4 黄	粘土	小礫を多量に含む
W2	1 10YR3/3 黄褐色	粘土	柱底跡、小礫を多量に含む
	2 10YR6/8 黄褐色	粘土	小礫を多量に含む
W3	1 10YR3/8 黄褐色	粘土	中礫を多量に含む

第17図 SB 5 挖立柱建物跡・SA 2 柱列断面図



第18図 b + c区平面図

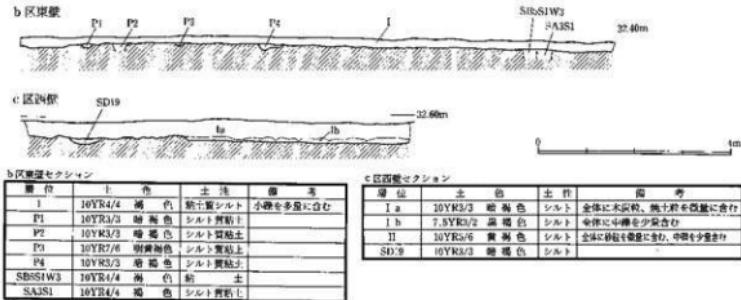


図19 b・c区断面図

**S D 20溝跡** 総長2.9m以上で、SD19と重複しながらほぼ平行に延びる溝跡である。上幅182cm、下幅170cm、深さ10cmで、壁は垂直気味に立ち上がり、断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-38°-Wで、堆積土は黒褐色シルトである。

**S B 5** 堀立柱建物跡、**S A 4** 柱列を切り、**S D 19**溝跡に切られている。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

### O c 区

**S B 2** 堀立柱建物跡 第8次調査で検出した南北4間、総長9.6m(柱間寸法210~275cm)、東西7間以上、総長14m以上(柱間寸法217~273cm)の東西棟の建物跡の南西隅を推定位置で検出した。柱穴の掘り方は一辺100~130cmの方形か隅丸方形で、柱痕跡は直径24~30cmの円形である。S1とS3の柱穴には抜き取り穴が見られる。柱穴の深さは一定せず、S2の柱穴は遺構を検出した上面より3cmほどできわめて浅い。

〔出土遺物〕 柱穴の掘り方埋め土より土師器、須恵器、平瓦、繩文土器片が少量化出している。

**S D 18**溝跡 総長1.2m以上で、東西方向に延びる溝跡である。上幅50~68cm、下幅41~54cm、深さ6~11cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面にはやや凹凸がある。方向はE-4°-Nで、堆積土は黒褐色、暗褐色シルトである。

〔出土遺物〕 堆積土中よりG-41均整唐草文軒平瓦(第15図1)、土師器、赤焼き土器、須恵器、瓦、繩文土器片が少量化出している。

### 3.まとめ

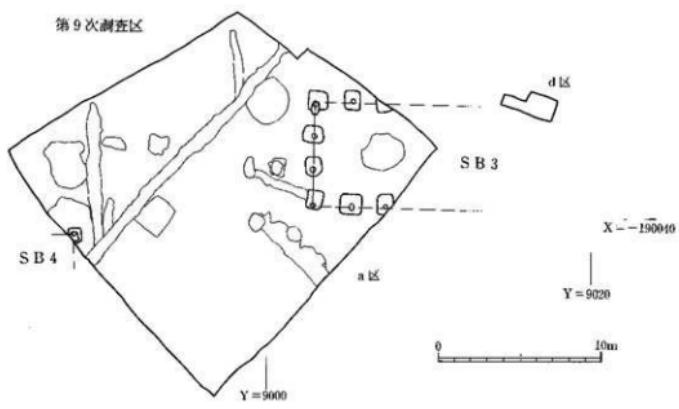
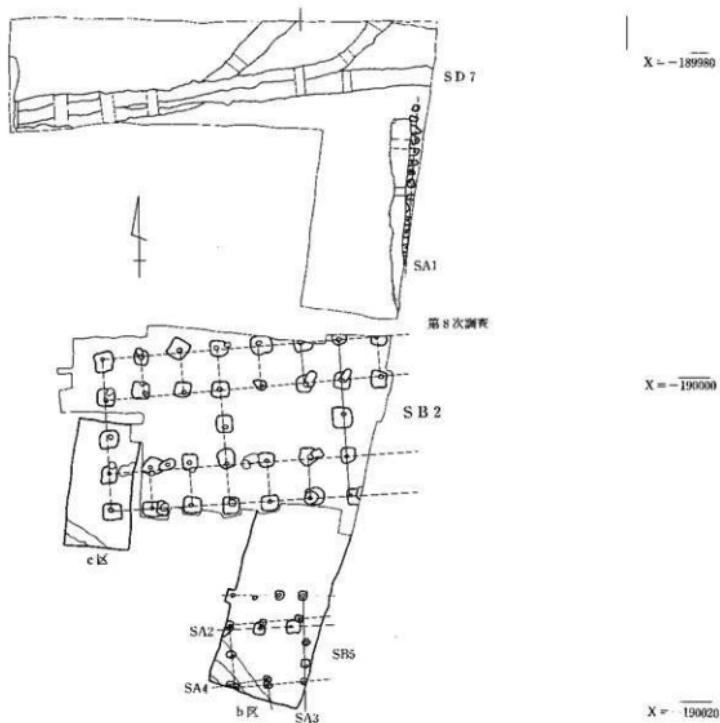
今回の第9次調査で発見された遺構は、堀立柱建物跡4棟、柱列3列、竪穴遺構2基、溝跡9条、土坑14基、ピットなどである。ここでは若干の考察を加えながら、以下の項目を検討し「まとめ」としたい。

#### (1) S B 3 堀立柱建物について

今回の第9次調査区は、昨年度実施した第8次調査区の南に位置しており、第8次調査で発見し「僧房」としたS B 2 堀立柱建物跡に関連する建物跡の検出を目的として実施した。

今回発見したS B 3 堀立柱建物跡は、桁行が4間ないし5間、梁行が3間で、規模の点からは金堂や講堂に相当する建物跡ではないと考えられる。しかし柱の掘り方は一辺が1mを超えるものが多く、柱痕跡も30cm以上のものがほとんどである。「僧房」とした建物跡と比較すると、掘り方が深く形状も方形で乱れていない。

建物の用途については柱の抜き取り穴から油煙の付いた土師器片が出土している。建物跡の東側の第3次調査区でも油煙の付いた土師器片が30個体以上出土し、「讀院口」と墨書きされた須恵器片も出土している。したがって土師



第20図 燕沢遺跡遺構配置図

器を灯明皿として使用し、しかも一括して大量に廃棄している様相が窺われる。このような類例は多賀城廃寺の南方の高崎遺跡や、西方の山王遺跡にあり、「万燈会」などの仏教行事に使用されたと推定されている。油煙の付いた土師器がS B 3 挖立柱建物跡の抜き取り穴に入り、その周辺からも出土するということは仏教に関連した行事がこの周辺で行われていたと推定されよう。

この建物の柱掘り方からは赤焼き土器片が出土していない。しかし抜き取り穴からは赤焼き土器D-62鉢や須恵器E-10長頸壺などが出土している。赤焼き土器D-62鉢は赤焼き土器の中でも大型のもので、体部が直線的に外傾している。この赤焼き土器は陸奥府である多賀城跡から出土した土器群と比較すると、E群あるいはF群土器とされる土器群のなかの、須恵系土器の範囲に含まれるものである。E群土器は10世紀前半頃、F群土器は10世紀中頃と位置付けられている。しかし平成3年度に実施された多賀城跡の溝の池地区の調査では、基本層位10層より出土したE群土器以前のD群土器の中にも須恵系土器の坏類と鉢類が含まれていた。よって赤焼き土器については9世紀後半代に遡ることが指摘されている(註2)。本遺跡の赤焼き土器D-62鉢の口縁部形態と似たものがその中に含まれている。また須恵器E-10長頸壺は頸部と体仮の境にリング状の突帯を有するものである。この形態や胎土の特徴から福島県大戸窑跡産の須恵器である可能性が高い。年代は9世紀の中葉から後半にかけてのものと考えられる。

このような遺物の出土状況から、S B 3 挖立柱建物跡が建てられたのが9世紀後半代でも赤焼き土器の出現する以前で、建物が廃絶したのは赤焼き土器が出現して以降の9世紀後半から10世紀前半頃と考えられる。昨年検出したS B 2 挖立柱建物跡「僧房」からは柱掘り方に赤焼き土器が含まれていたため、10世紀前半代の建物跡と考えられた。したがって「僧房」の建てられる以前にS B 3 挖立柱建物跡が先行して建っていた可能性がある。ただし今回の調査ではS B 3 挖立柱建物跡の柱穴の一部を掘り下げたにすぎないので、先行する可能性を指摘するに止めた。今後周辺の調査を持って建物の全容、機能および全体の変遷については検討していきたい。

## (2) S I 4 穫穴造構の出土遺物について

今回の調査で、S I 4 穫穴造構(以下、S I 4と略す)より土師器坏が数個体ずつ重なって大量に出土した。このような土師器の出土状況は、かつて東北大学名譽教授伊東信雄氏が報じたもの(註3)と同様の様相を呈している。出土遺物には土師器の他に、丸瓦、平瓦、鉄製品がある。土師器の中で図示できたものは墨書きされたD-46(註4)を含めて41点である。

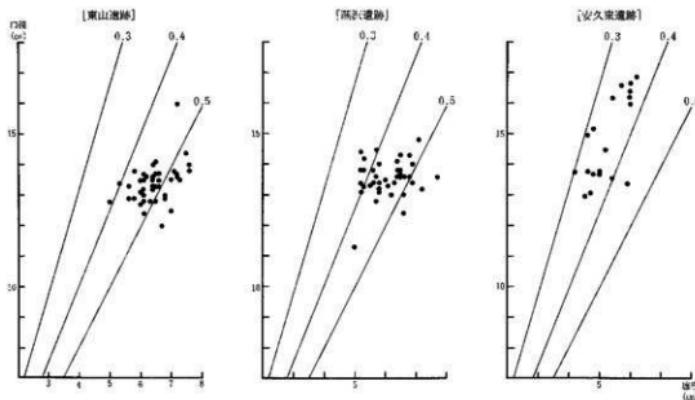
S I 4 から出土した土師器坏は、すべて製作にロクロを使用している。これらは東北地方南部の土師器編年型式の表杉ノ入式に該当するものである(註5)。表杉ノ入式の土師器坏については、須恵器・赤焼き土器との共存関係、口径に対する底径の比率(以下、底口比と略す)、切り離し技法や再調整の有無などによりその変遷が論じられている。1983年以降宮城県内では、地域毎に編年が検討されるようになってきており(註6)、その成果を総合したのが下の表1である。これによれば時代が下るに従い、坏全体の中で赤焼き土器坏の占める割合が増加し須恵器坏の占める割合が低下し・消失するという。また、一定期間内における底口比の減少化、外面再調整の簡略化などが指

遺跡名	宮城県 SI20 IV A群	青森県 SI21	台ノ山 SI 8	東山 土器	東石内 SI 2	宮城県 SI54 IV B群	安久美 SI 2	清水水 SD 9内SK 1	鹿島島 SK 1・SK 4	福井前 SD 1・SD 2
赤焼き坏	28%	6%	0%	0%	0%	0%	45%	42%	62%	98%
須恵器坏	28%	18%	33%	31%	0%	0%	11%	6%	0%	0%
底口比	0.6	0.52	0.52	0.46	0.44	0.43	0.36	0.38	0.39	0.4
外側調整	ロクロナデ 凹輪ケズリ 手持もケズリ	ロクロナデ 凹輪ケズリ 手持もケズリ	ロクロナデ 凹輪ケズリ 手持もケズリ	ロクロナデ 凹輪ケズリ 手持もケズリ	ロクロナデ 凹輪ケズリ 手持もケズリ	ロクロナデ 凹輪ケズリ 手持もケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
切り離し技法	へきり へきり へきり へきり									
年代	8C末~9C初			SC中期		10C前半		10後半		

表1 表杉ノ入式における土師器坏の変遷

摘できる。

S I 4 から出土した壺の特徴をあげれば次のようになる。第1に、赤焼き土器、須恵器を含まず、土師器のみで構成されていること。第2に底口比は、0.36～0.57の範囲に分布し、0.45前後に集中していること。第3に外面調整は、回転糸切り後手持ちヘラケズリを施しているものが3点見られるほか、底部回転糸切り後無調整のものが主体（38点）を占めていることである。以上の特徴を表1の変遷に当てはめると、底口比から東山遺跡土器溜出上土



第21図 土師器壺の口径と底径

部器の傾向に近いことが窺える。（第21図）

表1の遺跡のうち、ここでは実年代が比定されている東山遺跡土器溜出上土器群及び安久東遺跡S I 2出土土器群と比較してみたい。安久東遺跡出土の土器群は赤焼き土器の占める割合が多く、底口比が0.36となっている。これに対し、東山遺跡の土器群は、赤焼き土器を全く含まず、底口比が0.46となっておりS I 4土器群の様相と近似している。実年代は、東山遺跡土器溜出上土器群が9世紀中葉頃、安久東遺跡S I 2出土土器群が10世紀前半頃と考えられている（註7）。よってS I 4出土土器にも9世紀中葉から後半を中心とした頃の年代が与えられよう。又、S I 4からはG-34平瓦が出土しているが、これは凸面に繩叩き、凹面に粗い布目痕を残しており、多賀城跡IV期の瓦と同様の特徴を有しており（註8）、869年に上限を求めるのである。このことは、上述の年代観と矛盾しない。以上よりS I 4出土遺物も9世紀後半、869年以降に一括投棄されたものと考えられる。

S I 4出土の土師器壺には、内外面に油煙状の付着物や、底部内面に炭化した残渣物が認められる。具体的には  
①内面に薄く赤褐色の油煙状付着物があるもの（D-18、D-19、D-21、D-23、D-25、D-27、D-31、D-32、D-36、D-37、D-39、D-40、D-44、D-45、D-54、D-55、D-56、D-57）  
②内面に薄く光沢のある黒色の油煙状付着物があるもの（D-20、D-22、D-26、D-28、D-30、D-34、D-35、D-38、D-41、D-43、D-46、D-47、D-49、D-50、D-51、D-53、D-56、D-57）  
③底部内面に炭化した残渣物が厚く付着したもの（D-29、D-42）  
④口縁部内面に灯芯の痕跡があるもの（D-34、D-43、D-56）（図版15-23～25）  
⑤外面上に薄く光沢のある黒色の付着物があるもの（D-18、D-28、D-30、D-35、D-38、D-43、D-45、D-47、D-49）などである。以前の調査で出土した壺類からも同様の痕跡が確認されており、灯明皿としての使用を想定している（註9）。今回出土した土師器壺も同様の用途が考えられるが、土器内外面の付着物についてより詳細な検討が必要である（註10）。

### (3) S K 7 土坑出土の単弁蓮華文軒丸瓦について

出土した軒丸瓦は、瓦当部の直径が推定で17.7cm、内区と周縁の間に一条の園線が巡る。内区は直径11.2cmで中心に直径3.8cmの中房がつき、蓮子は7個配されている。周辺に八葉の花弁があり、内部に細い棒状の子葉がある。花弁の間には間弁があり、端部が盛り上がっている。このような特徴を有する軒丸瓦は、南西に1.8km離れた大蓮寺跡から出土した単弁蓮華文軒丸瓦と同じであり(註11)、7世紀末葉から8世紀初頭の年代に位置付けられている。

この軒丸瓦は大蓮寺跡以外で出土したことではなく、今回の調査で初めて燕沢遺跡から発見された。これによつて大蓮寺跡で生産された軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦の全種類の瓦が、燕沢遺跡から発見されたことになる。したがつて7世紀末葉から8世紀初頭にかけて瓦葺きの建物が周辺に存在する可能性がさらに強まつたと言えよう。

### (4) b・c区の調査の成果から

b区からは小規模な掘立柱建物跡や柱列などが発見された。各々の年代については不明であるが、数時期の変遷があることがあきらかになった。方向の点からみると「僧房」と考えられたS B 2 掘立柱建物跡(N-4'-W)と同時に建つ可能性があるのは、S B 5 掘立柱建物跡(N-5'-W)である。これらの2棟とS B 3 掘立柱建物跡(N-1'-E)とは微妙に方向がずれ、建てられた時期の異なる可能性がある。この点は(1)のS B 3 掘立柱建物跡の年代の検討とも矛盾するものではないと考えられる。

#### (註)

註1 多賀城市文化財調査報告書第37集 「高崎遺跡」 (第11次) 1995

同様の付着物のついた坏瓦を多量に出土した高崎遺跡では、付着物について化学分析した結果、油煙との結論を得ている。今回文書を執筆するに際し、S I 4 出土土器の付着物と高崎遺跡出土坏瓦の付着物とを比較対照した結果、ほぼ同一のものであることが確認できた。又、多賀城市理歴文化財調査センターの千葉孝弥氏からは資料の提供と恩恵なる助言を頂いた。記して感謝したい。

註2 宮城県多賀城跡調査研究会編1991 「多賀城跡」 III 第61次調査

註3 伊東信雄 「仙台市史3 別編1」 三 燕澤古瓦出土地 1950

註4 墓者は、体部外面のほぼ中央に認められる。この墨書きについては、東北大文学部教授今泉謙雄氏より倒位で書かれているとの指摘をうけたが、判読はできなかつた。

註5 氏家和典 「東北土器の形式分類とその編年」『歴史』第14号 1957

註6 村田晃一 「宮城郡における10世紀前後の上器群」『福島考古』36号 1995

柳澤和明 「多賀城周辺における10世紀前後の土器群」 第1回 岩手県古代末土器の勉強会 資料 1995

註7 仙台市文化財調査報告書第99集 「丘本松窯跡」 1987

註8 G-34平瓦については、多賀城跡調査研究会所長 進藤秋輝より多賀城跡IV期(貞觀11年(869)以降)の瓦であるとの御教示を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

註9 仙台市文化財調査報告書第116集 「燕沢遺跡」 (第3次) 1988

仙台市文化財調査報告書第195集 「仙台平野の遺跡群 XIV」 1995

註10 註1に同じ

D-20、D-29、D-31、D-42、D-44については、諭もしくは漆紙の付着している可能性も残されているため今後とも検討していくべきだ。

註11 仙台市文化財調査報告書第168集 「大蓮寺跡」 - 第2・3次発掘調査報告書 - 宮城県教育庁文化財保護課文化財専門監 桑原滋郎、多賀城跡調査研究会所長 進藤秋輝同氏より大蓮寺跡出土の軒丸瓦と同様との御教示を頂いた。

# 写 真 図 版





図版1 第9次調査区航空写真（平成6年撮影）



図版2 a区東半・b区・c区全景（南より）



図版3  
b区全景  
(南より)



図版4  
c区全景  
(南より)



図版5  
SB 3 捩立柱建物跡全景  
(南より)



図版6  
SB 3 N 1 W 1抜き取り穴遺物出土状況



図版7 SK7土坑検出状況（北より）



図版8 SK7土坑遺物出土状況（F-19）



図版9 SK7土坑出土遺物（比較）  
(左 大蓮寺跡出土軒丸瓦)



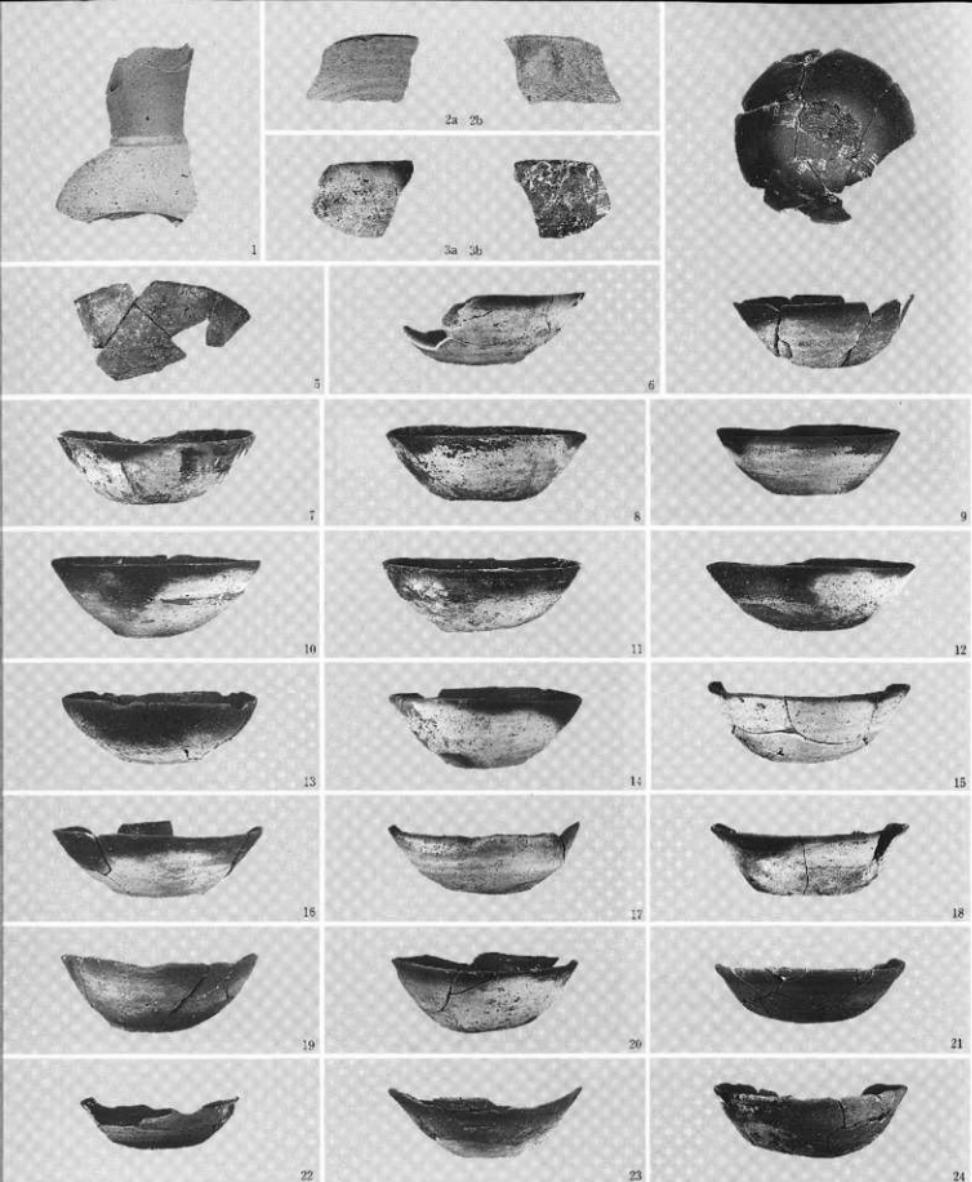
図版10  
S14竪穴遺構  
遺物出土状況  
(西より)



図版11 SB4据立柱建物跡N1E1柱穴（西より）

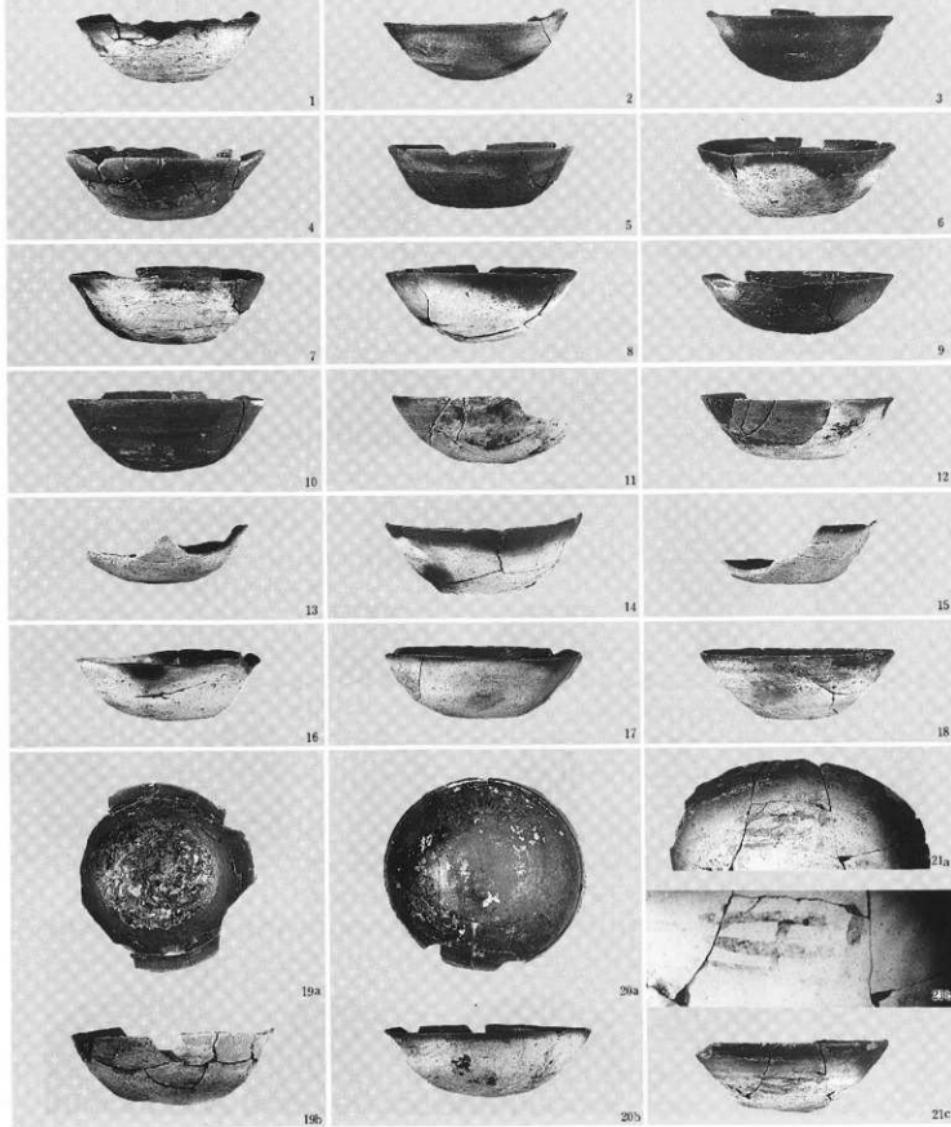


図版12 SK12土坑（南より）



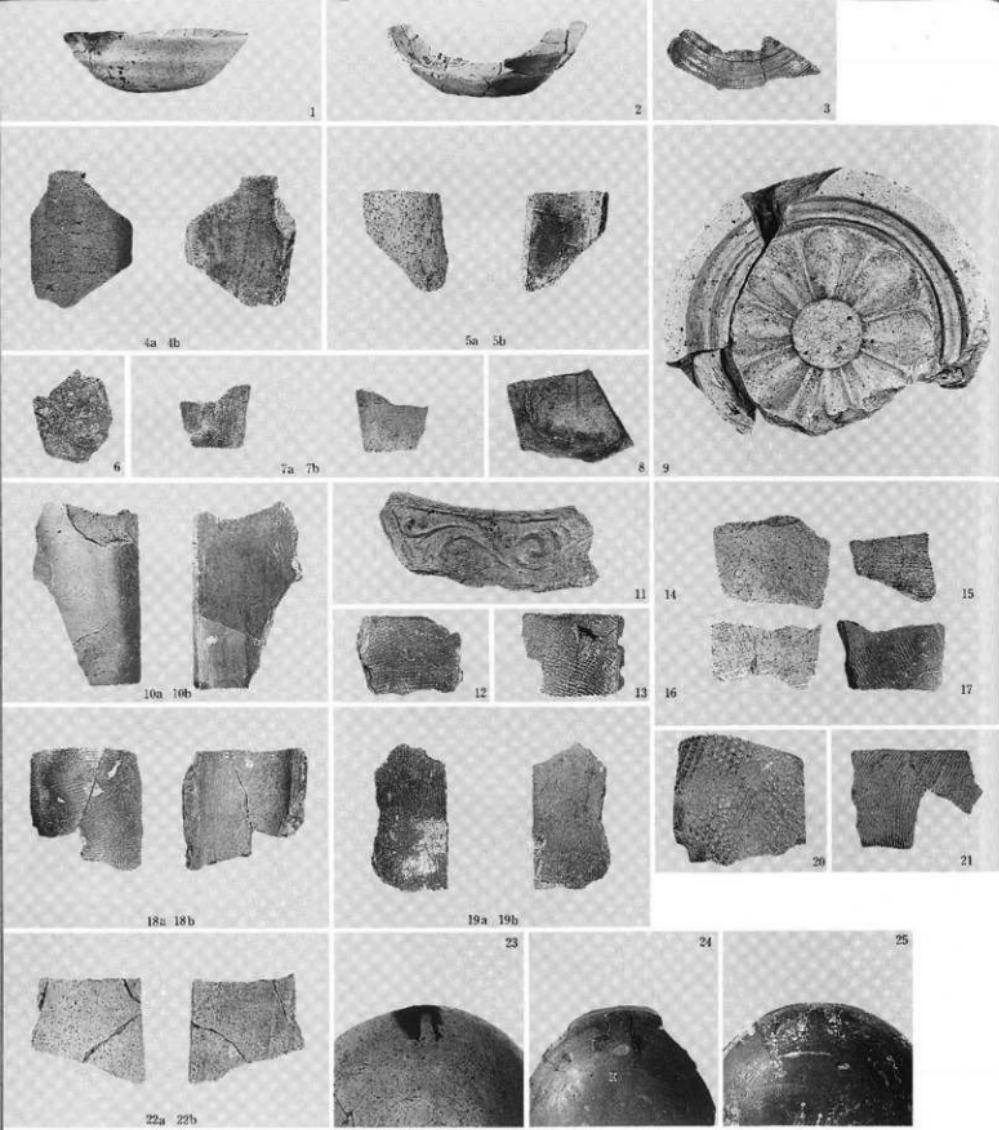
- |                            |                |                |
|----------------------------|----------------|----------------|
| 1. E-10 長頸壺 SB3 N1W1 抜き取り穴 | 9. D-20 壺 S14  | 17. D-28 壺 S14 |
| 2. D-62 脚 SB3 N1W1 抜き取り穴   | 10. D-21 壺 S14 | 18. D-29 壺 S14 |
| 3. D-66 壺 SB3 N1W1 抜き取り穴   | 11. D-22 壺 S14 | 19. D-30 壺 S14 |
| 4. D-58 壺 SB3 N1W1 抜き取り穴   | 12. D-23 壺 S14 | 20. D-31 壺 S14 |
| 5. D-65 壺 SB3 N1W1 抜き取り穴   | 13. D-24 壺 S14 | 21. D-32 壺 S14 |
| 6. D-59 壺 SB3 N2W2 摘り方     | 14. D-25 壺 S14 | 22. D-33 壺 S14 |
| 7. D-18 壺 S14              | 15. D-26 壺 S14 | 23. D-34 壺 S14 |
| 8. D-19 壺 S14              | 16. S-27 壺 S14 | 24. D-35 壺 S14 |

図版13 出土遺物 (1)



1. D-36 坏 S I 4    8. D-44 坏 S I 4    15. D-52 坏 S I 4  
 2. D-37 坏 S I 4    9. D-45 坏 S I 4    16. D-53 坏 S I 4  
 3. D-38 坏 S I 4    10. D-47 坏 S I 4    17. D-54 坏 S I 4  
 4. D-39 坏 S I 4    11. D-48 坏 S I 4    18. D-55 坏 S I 4  
 5. D-40 坏 S I 4    12. D-49 坏 S I 4    19. D-42 坏 S I 4  
 6. D-41 坏 S I 4    13. D-50 坏 S I 4    20. D-57 坏 S I 4  
 7. D-43 坏 S I 4    14. D-51 坏 S I 4    21. D-46 坏 S I 4

图版14 出土遗物 (2)



1. D-56 环 S14  
 2. D-61 环 S14  
 3. I-3 绿釉陶器 SB5S1W1掘り方  
 4. F-18 丸瓦 S14  
 5. F-22 丸瓦 S14  
 6. N-2 銀淨 S14  
 7. G-34 平瓦 S14  
 8. D-60 环 S15

9. F-19 軒丸瓦 SK7  
 10. G-40 平瓦 SD17  
 11. G-41 斜平瓦 SD18  
 12. G-39 平瓦 SD17  
 13. G-38 平瓦 遺構検出面  
 14. G-43 平瓦 SB3N4W3掘り方  
 15. G-44 平瓦 SB3N1W1掘り方  
 16. G-45 平瓦 遺構検出面

17. G-42 平瓦 SD19  
 18. F-21 丸瓦 遺構検出面  
 19. G-37 平瓦 遺構検出面  
 20. G-36 平瓦 遺構検出面  
 21. G-38 平瓦 遺構検出面  
 22. G-33 平瓦 SA2E1掘り方  
 23. D-56 环 灯芯痕跡  
 24. D-34 环 灯芯痕跡  
 25. D-43 环 灯芯痕跡

図版15 出土遺物 (3)

## [ 2 ] 郡山遺跡

### 1. 位置と環境

郡山遺跡は仙台市太白区郡山二丁目～六丁目に位置し、東西800m、南北900mの60万m<sup>2</sup>に及ぶ遺跡である。遺跡の北から東にかけて広瀬川、南を名取川が流れ、西北は長町の市街地を介して標高100～200mの丘陵が迫り、西南は平野部が続いている。発掘調査は昭和55年から継続的に進められ、以下のことが明らかになってきている。新しい時期（II期官衙）と古い時期（I期官衙）の2時期の官衙が同地にあったこと。I期官衙は造営基準方向が真北から30～40°ふれており、材木列や溝跡により区画され内部には官舎や倉が集中していたこと。II期官衙は造営基準方向が真北方向を取り、四町（428m）四方の範囲で外郭に材木列と大溝をめぐらしていたこと。内部中央には四面廻付建物の他に、石敷や石組池などの稀な遺構があること。II期官衙南方には同一基準方向の寺が建っていたこと。寺とII期官衙の間には、四面廻付建物をはじめ大型の掘立柱建物群が存在すること。7世紀後半から8世紀初めまで、官衙の機能が終了することなどである。

### 2. 調査概要

郡山遺跡の発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第210集「郡山遺跡XVI—平成7年度発掘調査概報—」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめる。

#### 第108次調査

第108次調査は、仙台市青葉区上杉2丁目1～14セルコホーム株式会社新本恭弘氏より、太白区郡山2丁目68～2において、共同住宅の新築に伴い発掘枠が平成7年7月25日付けで提出されたため実施した。建築計画では木造2階建ての共同住宅で、基礎部分の掘削も表土上面より45cmと浅く、遺構を損なう可能性は低かった。しかしこの地点では、第99次、第103次調査の結果からI期官衙の西辺を区画する溝跡や材木列が通過すると予想され、それらの遺構を確認する目的で調査を実施した。発掘調査は平成7年8月1日から8月4日にかけて2×20mの調査区を設定して行なった。

発掘調査の結果、宅地化する際の盛土が厚く2m程度盛られていた。盛土の下で旧水田の耕作土を検出し、さらにその直下でピットを2基発見した。遺物が出土しなかつたためピットの時期は明らかではない。

遺構を検出した土層を見ると、これまでの調査で古代の遺構が検出された屑より下層の屑上で検出されており、上部が著しく削平されていることが考えられた。当初推定したI期官衙に関わる遺構は発見されなかった。

#### 第109次調査

第109次調査は、宮城県柴田郡村田町大字菅生寺前22-6馬場繁氏より、仙台市太白区郡山5丁目11-19において、共同住宅新築計画が提示されたことに伴って実施した。当地点は、郡山廃寺の推定方二町寺域の中央部、寺院中枢区画南辺付近にあたる。これまで周辺で行われた調査では、寺院僧坊建物跡や講堂基壇跡などの遺構の他、多くの瓦片などが出土している。よって当市教育委員会では、寺院中枢区画南辺とさわめて近接しているため、平成7年11月27日から12月4日にかけて調査を行った。

その結果、竪穴住居跡1軒以上、土坑あるいはピット2基などを検出した。遺物は、SI1623 竪穴住居跡の堆積土中より瓦片が數十点出土している。

なお、推定方二町寺域の寺院中枢区画南辺に関連する遺構は検出されなかった。



第22図 郡山遺跡位置図

報告書抄録

ふりがな	せんだいへいやいせきぐん						
書名	仙台平野の遺跡群						
副書名	平成7年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第9次調査など						
巻次	XV						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第211集						
編著者名	長島栄一、農村幸宏						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-71宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894						
発行年月日	1996年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村 遺跡番号					
燕沢遺跡	宮城県仙台市宮城野区 燕沢東三丁目他	04100 01001	38° 17' 10"	141° 12' 00"	19951023 ~19951215	450m <sup>2</sup>	重要遺跡 の範囲 確認調査
郡山遺跡	宮城県仙台市 太白区郡山三丁目他	04100 01003	38° 13' 13"	141° 18' 30"	19950801 ~19951204	72m <sup>2</sup>	共同住宅建 築工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
燕沢遺跡	寺院跡	平安	掘立柱建物跡・柱列 溝跡・竪穴遺構・土坑	土師器・須恵器 赤焼き土器・繩文土器 瓦			
郡山遺跡	官衙跡	古墳 奈良	竪穴住居跡	瓦			

---

仙台市文化財調査報告書第211集

**仙台平野の遺跡群XIV**

—平成7年度発掘調査報告書—

1996年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263-1166

---

